

岡山 史料ネット Newsletter Vol. 6 2021. 9

オンラインでおこなわれた岡山史料ネット
2021 年度活動報告会の様子

活動報告 (2021 年 3 月～2021 年 8 月)

1. 総会・活動報告会

2021 年 8 月 1 日 (日) に、総会・活動報告会をオンラインで開催しました。総会には 14 名・活動報告会には約 40 名の参加がありました。

総会では 2020 年度活動報告案・決算案・会計監査についての報告、2021 年度の活動方針案・予算案・役員案についての報告があり、質疑応答などをふまえ、いずれも承認されました。議長は久野修義さんが務められました。新型コロナウイルス感染症の流行をめぐる状況が早く落ち着き、ボランティアのみなさんとの活動が再開できることを願っております。

つづく活動報告会は「西日本豪雨と図書館」として、2021 年 1 月の真備図書館再開に尽力された藤井広美さん (真備図書館前館長) に「真備図書館の被災と再建」と題して、被災後から多くの方の支援のなかで再開にいたる過程やそのなかで考えられたことなどについて、お話いただきました。また、岡山県立図書館の隈元恒さんと瀬戸内市民図書館の村上岳さんに、災害に備える、災害を伝えるといった観点からのウェブコンテンツの整備やレファレンス、展示会といった取組状況

などについてコメントいただきました。会には、ウェブサイトで催しについて知られた図書館など全国の専門機関の方も参加して下さいました。本号に発表の内容をそれぞれ寄稿いただいておりますので、どうぞご覧ください。

2. 岡山市災害ボランティアネットワーク連絡会議

「岡山市災害ボランティアネットワーク」は災害時に活動するボランティア団体の連携のために設けられた組織で、岡山市 (市民活動支援室) が所管しています。その連絡会議が 2021 年 8 月 5 日 (木) に、2021 年度の第 1 回連絡会議がハイブリッドで開催され、41 の加盟団体のうち、岡山史料ネットを含む 13 団体が参加しました。

会議では市社会福祉協議会から「岡山市災害ボランティアセンター設置・運営マニュアル」に基づいて、ボランティアセンターの運営方針などについての説明がありました。つづいて各団体が短く自己紹介し、それぞれ災害時に提供できる支援の内容についての質疑応答・意見交換がありました。

(文責・松岡弘之)

真備図書館の被災と再建

藤井広美（倉敷市立真備図書館前館長）

今年〔2021 年〕の 1 月 30 日の真備図書館再館にあたり、岡山史料ネットの方にはとてもお世話になりました。

救出された資料について、カビがはえないように冷凍し、ゆっくりと解凍しながら広げてキッチンペーパーを挟み、また冷凍する作業、私も一度体験いたしましたが本当に大変でした。修復して持ってきていただいた資料は 2 階の棚の上へ、今度は水に浸からないように保管しました。

2018 年 7 月の被災当時、図書館 1 階は 320cm、2 階は 3.5cm まで浸水しました。真備は下水道が整備されていないため、汚泥には下水も含まれます。

数年前にハザードマップを見た時は「どうして真備はこんなに 2 m 以上浸水するのだろう」と思っていました。ハザードマップ通りに、住宅地はほぼ浸水しました。

南の小田川から水が押し寄せたため、南の窓は割れて、洗濯機の中のように水が回り、木製の館内案内図が当たったのか、5 m の高さの天井のプラスチック部分がボロボロに割れていました。

片づけの時には停電しており、外の気温が 35 度でも、水浸しの床で高温多湿な室内よりも風がある分、館内は涼しい状態でした。被災状況がテレビで取り上げられた後、中学時代の同級生が来てフォークリフトや高圧洗浄機を貸してくれました。

図書館の被害としましては、建物はもちろん、本・雑誌・CD など 12,700 点の本が水没しました。それに加え真備で受け渡すために他図書館から送られてきた予約本、1,200 点の資料、町内の利用者へ貸し出していた 2,800 点も、水没しました。

貸し出していた本の状況を確認するために、自宅が浸水してしまった利用者さん達へ連絡する必要がありました。登録の電話番号は固定電話の方ばかりで、ほとんど繋がりません。葉書でご連絡しましたが、家じゅうのものが全て無くなった方々へどう尋ねるか、苦慮

しました。

真備の市街地はほぼ水害に遭った中、仮設住宅にボランティアで来られていた人が「うちは被害がなくて申し訳ないです」と仰っていたのが印象に残っています。真備の町中も、暑さと臭い、埃にまみれて粉塵が舞っていました。戦後の記録映像のようでした。全てのものが泥水を吸って重くなっていました。

今年も熱海などで被害があり、片づけをされていますが、2018 年もあんなに大変だったのに、今はコロナ禍でボランティアが被災地に行けないため、すごく大変だと思います。

テレビのアナウンサーと一緒に仮設住宅へ行った際、「何もかも流されてしまって」と嘆く高齢者に、アナウンサーが「命があってよかったですね」と声をかけると、「一緒に流れてしまえばよかったのに」と返されました。気まずい沈黙が流れた後、その方からの「それでも本を読んでいる時は気が紛れるの」という言葉に、図書館の役割が表れていると思います。

被災の復興図書館の館長として、普段の業務とは違うこともたくさんあり、家が流れた方よりは恵まれているとはいえ職場が水没してしまったことに思うことがないわけではありませんでした。

しかし、父から「考えても仕方ないことを考えても無駄」「どんなにいいことを考えても出来ないと仕方がない」「出来ることは最善を尽くす」と教えられていたため、出来るだけのことはやろうと頑張りました。

真備で戦時中に疎開した横溝正史の娘さんをはじめ、たくさんの方から再館にむけて寄贈いただきました。なかでもライオンズクラブの方から大型絵本を寄贈いただき、その中の『おおきなかぶ』を読んだ際、これは今の真備図書館も同じだと感じました。

カブを抜くために、おじいさんが手伝ってと呼んできたのは、おばあさんだけなんです。みんなが手伝っ

てくれて、抜けない時は助っ人を読んでくれて、抜けない（被災）状態から抜けた（再館）状態に向かう話だと。たくさんの方が色々な気持ちで図書館を助けてくださったのが本当にありがたいです。

被災前、平時の真備図書館の利用者数は1日当たり200人ほどでした。しかし再館直後の1週間で3,600人もの方が来館くださり、皆さんが待っていてくださったのもありがたいことだと感じています。ポ

ランティアの方々が用意してくださった絵も飾らせてもらっていますし、再館記念文集『真備のことが好き』も入口近くでご覧いただけます。

再館に向けて11月頃より綺麗な新しい本がたくさん届き、並んでいる様子を取材の方が「本屋みたいですね」と話されていました。寄贈を含めて85,000点が並んでいます。汚泥にまみれた惨状を思うと、綺麗な本ばかりでとても嬉しいです。

本当にありがとうございました。

《コメント》

災害に対して図書館の出来ること

隈元 恒

（岡山県立図書館サービス第二課郷土資料班長）

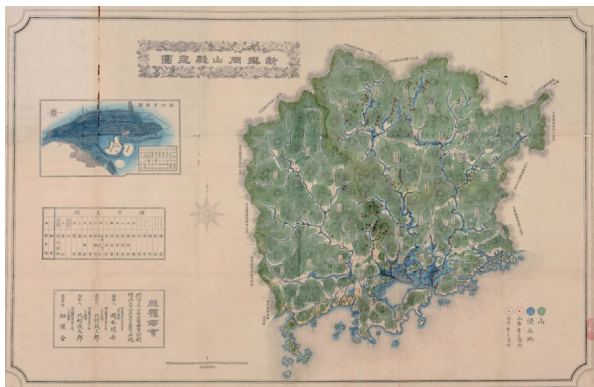
1 はじめに

「晴れの国」をキャッチフレーズとして、災害が少ないと言われている岡山県ですが、もちろん災害はゼロではありません。平成30年7月豪雨による災害などは皆さんの記憶にも新しいことでしょう。これら災害に対して、防災・減災の観点から見た岡山県立図書館の取組みをご紹介します。

2 「過去を調べる」＋「学ぶ」

自治体の記録とも言える自治体史誌は地域で起こった水害、地震、疫病等も記録しています。また、古い絵図・地図類はその地域がどのような土地であるのか、地形の変化はどう変遷したのかを視覚的に知ることができます。

一例ですが、『新撰岡山県全図』は明治22年（1889）に発行された県域および岡山市街の地図です。そこに明治25年（1892）の水害による被害として浸水地、山崩れおよび破堤の著しい箇所が追記されています。



『新撰岡山県全図』（明治22）岡山県立図書館所蔵

3 「現在の取組を知る」＋「備える」

過去の出来事を調べるだけでなく、現在の自治体防災計画、ハザードマップ・避難マニュアル等も有益な情報と言えるでしょう。これらの資料を収集し、利用に供することで、現実にはどのような準備が必要なのか、近い将来、自分の身近な地域で災害が起こった場合にどのような行動をとればよいかを知り、減災につなげることが可能となります。

4 「記録を残す」＋「伝える」＋「活かす」

県民から募った写真や動画等を県危機管理課から資料提供いただき、「デジタル岡山大百科」内に「平成30年7月豪雨災害デジタルアーカイブ」として公開しています。

これは実際の災害に際して、被害状況がどうであったのか、ボランティア等による支援活動の様子、災害からの復旧・復興はどう進んだのかなどを次世代へ伝承していくための記録です。ぜひご覧ください。



「平成30年7月豪雨災害デジタルアーカイブ」

5 おわりに

岡山県立図書館に限らず、最寄りの図書館の資料を活用して防災・減災にご活用いただければ幸いです。

「西日本豪雨と図書館」コメント

村上 岳（瀬戸内市民図書館館長）

瀬戸内市は岡山市の東隣に位置し、市の西端に一級河川である吉井川、市内に千町川、干田川といった河川がある。過去に、これらの氾濫による大規模な水害や、沿岸部での高潮被害を経験している。西日本豪雨のとき、市内に大きな被害は無かったが、比較的近い岡山市東区の平島地区で大きな水害があった。

瀬戸内市民図書館は、2016年6月に、市の新たな拠点図書館としてオープンした。当館では「せとうち発見の道」という郷土資料展示の企画展を、年4回行っており、瀬戸内市の様々な文化財や地域の歴史、文化について紹介している。

2020年9月～11月に「災害の記録と瀬戸内市の防災」として、瀬戸内市の過去の災害に関わる記録資料などを展示した。西日本豪雨での真備町の被害にも触れ、瀬戸内市消防本部から隊員5名を派遣していたことなども紹介した。展示では、市役所の危機管理課と連携して防災グッズの展示をするなど、防災意識

を高めてもらう、という取組をした。

瀬戸内市では、戦後の主な災害として、1945年、1976年、1990年、2004年の水害が挙げられる。2004年には、牛窓地区で大規模な高潮被害があり、当時の牛窓町立図書館が浸水し、一部の所蔵資料を廃棄することとなった。そのような経験もあり、岡山史料ネットの主催で、水損資料を救うワークショップを、瀬戸内市で開催したこともある。

1976年水害の写真では、邑久町尾張地域が浸水している様子がわかる。この場所に瀬戸内市民図書館が建っている。1976年と1990年の水害を受けて、河川改修や排水ポンプの整備などが進められた結果、以降の河川氾濫は抑えられている。しかし、今後、これまでにない雨量があった場合、この図書館も浸水の危険がある。

図書館では、過去の災害の記録だけでなく、現在進行中のコロナ災害についても、資料を残す必要がある。そして市民が活用できるように整備する必要があると考えている。

【書評】『残す。西日本豪雨災害 私たちは真備に何を残そうとしたのか』

西日本豪雨災害「残す。」編集チーム編著
2021年1月発行
本書は吉備内出版でPDFが公開されています。(※)

松田拓磨



本書には、2018年7月に倉敷市真備町、総社市・高梁市などを襲った西日本豪雨から該当地域の資料・思い出・生活など「大切なもの」を後世に残し、つなぎ、伝える活動に従事された方たちの記録が文集形式でまとめられている。

構成は【残す】・【つなぐ】・【伝える】のテーマ別に、関係者が自身の活動に対する思いや意義、具体的内容や手法などを記している。

紙幅の関係上、それらの内容全てをここで紹介することは出来ないが、共通していたのは「地域を守り伝

えていきたい」という熱い思いだった。

これらの活動の1つに史料ネットがあるが、私はこれまで史料ネットについて、ただ単に史料・文化財が失われないように保全し、レスキューしていく活動としか捉えていなかったのだが、その考えが根本から誤りだったことに気付かされた。史料・文化財を守り、後世に伝えるのは当然として、その先に何を見据えているかを分かっていなかった。

見据えているものとは、地域の中にある人々の生活の痕跡であり、人と人との関係性、思い出などの「大切なもの」である。

本書は、そうした「大切なもの」をいかにして残し、災害で分断された地域の関係性を繋ぎ、また一連の情報をどうやって後世に伝えていくのかという様々な活動の一端を知ることが出来る一冊となっている。

(※) <https://www.kibito.co.jp/nokosu>

事務局 〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1 岡山大学文学部日本史研究室内

電話 086-251-7442

e-mail okayamasiryonet@gmail.com

URL <http://okayamasiryonet.s1008.xrea.com/>

Twitter @okayamasiryonet